Hayato
SUMINO
CONCERT TOUR
January 19th – March 10th, 2023
2023
Reimagine
角野隼斗

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。

僕はここのところずっと、クラシックとジャズの共通点を探す旅をしています。
昨年はラヴェル、ガーシュウィン、バルトーク、アデスのピアノ協奏曲をはじめ
様々な曲を演奏する機会に恵まれましたが、それらはクラシック音楽でありながらも、
ジャズからの影響が多分に含まれたものでした。
そのような作品を演奏すると、僕の身体の全細胞がワクワクするような気持ちにさせられます。
今回、演奏する作曲家の一人であるフリードリヒ・グルダも、
クラシックとジャズの間での新しさを追求したアーティストでした。

そんな中、昨年はバロック音楽の魅力を再発見した年でもありました。
それはグールドのバッハや古楽器奏者の演奏を
聴き漁ったことからの影響がとても大きいのですが、
バロック音楽は僕が思っていたよりもずっと自由な音楽でした。
宗教に結びついていることから厳格な印象もありますが、
たとえば通奏低音やカデンツァといった概念は、
ジャズの言葉で言えばコードネームとアドリブでしょう。
ブラッド・メルドー、キース・ジャレットをはじめとして
多くのジャズ・ピアニストがバッハに興味を持ったように、
バロックの音楽は本質的に何かジャズに近い
グルーヴや精神性があるのではないか、と思ったのです。
時代としては300年前の音楽でありながら、
この現代においても全く古さを感じない、不思議な魅力があります。

バロック音楽と現代の音楽を分け隔てなく行き来しながら、
時には即興を混ぜながら、クラシック音楽の新しい魅力を
感じてもらうべくReimagine（再構築）する。
そんな願いを込めて今回のツアーのコンセプトに至りました。

ストイックで自由な音楽の世界を、楽しんでいただけたら嬉しいです。

角野隼斗

# Program

J.S.バッハ：インヴェンション 第1番 ハ長調 BWV772
**J.S.Bach: Invention No.1 in C major BWV772**

ラモー：新クラヴサン組曲集 第2番（第5組曲）雌鶏、未開人
**Rameau: Pieces de clavecin “La Poule” “Les Sauvages”**

グルダ：プレリュードとフーガ 変ホ短調
**Gulda: Prelude and Fugue in E-flat minor**

角野隼斗：追憶
**Hayato Sumino: Recollection**

J.S.バッハ：主よ、人の望みの喜びよ BWV147
**J.S.Bach: Wohl mir, daß ich Jesum habe BWV147**

J.S.バッハ：パルティータ 第2番 ハ短調 BWV 826
**J.S.Bach: Partita No.2 in C minor BWV826**
Ⅰ. Sinfonia
Ⅱ. Allemande
Ⅲ. Courante
Ⅳ. Sarabande
Ⅴ. Rondeau
Ⅵ. Capriccio

---------- 休 憩 ----------

角野隼斗：胎動
**Hayato Sumino: New Birth**

角野隼斗：Human Universe
**Hayato Sumino: Human Universe**

カプースチン：8つの演奏会用エチュード 作品40
J.S.バッハ：インヴェンションより
**Kapustin: Eight Concert Etudes Op.40** Ⅰ. Prelude
Ⅱ. Reverie
Ⅲ. Toccatina
**J.S.Bach：Invention No.13 in A minor**
**Kapustin: Eight Concert Etudes Op.40** Ⅳ. Remembrance
Ⅴ. Raillery
**J.S.Bach：Invention No.4 in D minor**
**Kapustin: Eight Concert Etudes Op.40** Ⅵ. Pastoral
**J.S.Bach：Invention No.14 in B-flat major**
**Kapustin: Eight Concert Etudes Op.40** Ⅶ. Intermezzo
Ⅷ. Finale

# hayato sumino 角野隼斗

1995年生まれ。2018年、東京大学大学院在学中にピティナピアノコンペティション特級グランプリ受賞。2021年、ショパン国際ピアノコンクールセミファイナリスト。これまでにポーランド国立放送交響楽団、ハンブルク交響楽団、ブダフォク・ドホナーニ管弦楽団、読売日本交響楽団、東京交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、日本フィルハーモニー交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、パシフィックフィルハーモニア東京、関西フィルハーモニー管弦楽団、札幌交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、群馬交響楽団、国立ブラショフ・フィルハーモニー交響楽団等と共演。2018年9月より半年間、フランス音響音楽研究所 (IRCAM) にて音楽情報処理の研究に従事。これまでにジャン＝マルク・ルイサダ、金子勝子、吉田友昭の各氏に師事。さらにFUJI ROCK FESTIVAL '22へ出演など、活躍の場はクラシックフィールドに留まらない。また、海外での活動も増え、2022年にはパリ公演、シンガポール公演、台湾ツアー、韓国ツアーなどを行い、現地の観客から称賛を得ている。2020年、1stフルアルバム「HAYATOSM」をリリース。最新作は、マリン・オルソップ指揮、ポーランド国立放送交響楽団とのライブ録音による「ショパン：ピアノ協奏曲第1番」。クラシックで培った技術とアレンジ、即興技術を融合した独自のスタイルが話題を集め、"Cateen(かてぃん)" 名義で活動するYouTube チャンネルは登録者数が110万人超、総再生回数は1億回を突破するなど、新時代のピアニストとして注目を集めている。CASIO電子楽器アンバサダー、スタインウェイアーティスト。

https://hayatosum.com/

# Program Note

M 道下京子

S 角野隼斗

## J.S.バッハ：インヴェンション
J.S.Bach：Invention

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1675～1750）は、ドイツ東部のアイゼナハ生まれ。各地の教会や宮廷のオルガン奏者などを務め、1717年からアンハルト＝ケーテン侯の宮廷楽長を務め、23年からはライプツィヒの聖トマス教会カントルのポストに就いた。バッハは、1707年にマリア・バルバラと結婚。その長男ヴィルヘルム・フリーデマンと次男カール・フィリップ・エマヌエルは音楽家として高い評価を得た。彼女が1720年に亡くなった翌年、バッハはアンナ・マクダレーナと再婚している。彼はケーテン時代、それぞれ15曲からなる《インヴェンション》《シンフォニア（３声のインヴェンション）》や、《平均律クラヴィーア曲集第１巻》など、多くの器楽曲を書き上げた。バッハは長男の教育のために1720年から作曲を行ない、その初期稿は「ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのための音楽帳」に収められている。この曲集では、《インヴェンション》は「プレアンブルム」、《シンフォニア》は「ファンタジア」と記されている。その後、改訂を経て、1723年に《インヴェンション》としてまとめられた。インヴェンションという言葉は、修辞学に由来すると考えられており、バッハはテーマやメロディを「発明」することにちなんでそのタイトルをつけた。「ヴィルヘルム・フリーデマン・バッハのための音楽帳」では、作品は難易度の順に配列され、バッハは演奏のテクニックを身につけることを意図していた。《インヴェンション》の改訂に際して、《平均律クラヴィーア曲集》と同じくハ長調から開始。また、音階的に配列され、調性感やさまざまな作曲手法が考慮された。 M

## ラモー：新クラヴサン組曲集 第２番（第５組曲）雌鶏、未開人
Rameau: Pieces de clavecin “La Poule”“Les Sauvages”

フランス生まれのジャン＝フィリップ・ラモー（1683～1764）は、バッハと同世代のバロック時代の作曲家。オルガニストとして活躍しながら作曲も行ない、オペラの創作に力を注いだ。また、理論家としても知られ、彼の根音バスの理論はその後の和声理論の基礎となった。1727年作曲の《新クラヴサン組曲集 第２番（第５組曲）》は９曲からなり、ト長調かト短調で書かれている。この組曲は舞曲集であるが、舞曲よりも表題のついた作品が多い。そのなかから、本日は２曲演奏される。第５番「雌鶏」／ト短調。ラモーのクラヴサン作品の中では最も有名な１曲で、めんどりの鳴き声を模している。初版譜の冒頭には八分音符の同音連打とすばやい分散和音に「co co co co co co co dai.」と記されている。第７番「未開人」／ト短調。弾むような動きが印象的で、メロディは、左手の分散和音とシンプルなハーモニーの響きに支えられ、しなやかな流れの中で歌い上げられていく。1735年に初演されたラモーのオペラ＝バレ《優雅なインドの国々》の第４幕の音楽にも取り入れられている。 M

## グルダ：プレリュードとフーガ 変ホ短調
Gulda: Prelude and Fugue in E-flat minor

フリードリヒ・グルダ（1930～2000）は、ウィーン生まれ。名ピアニストのブルーノ・ザイドルホーファーに師事し、1946年にはジュネーヴ国際コンクールで優勝。のちに、パウル・バドゥラ＝スコダとイェルク・デームスとともに“ウィーン三羽烏”と呼ばれた。バロックからコンテンポラリーまで幅広いレパートリーで知られ、特にベートーヴェンやバッハ、モーツァルト、近代フランスの作品の演奏に定評がある。さらに、1950年代からはジャズの演奏や作曲にも積極的に取り組むようになる。1965年に作曲された《プレリュードとフーガ》にも、ジャズのエッセンスが織り込まれている。この作品は、J.S.バッハ《平均律クラヴィーア曲集》と同じく「プレリュード」と「フーガ」からなる。グルダのこの作品の「プレリュード」も事実、バッハの同曲集第1巻の第1番（ハ長調）の「プレリュード」を連想させ、同じリズムによる分散和音がくり返されるなかで、ハーモニーは微細に変化していく。「フーガ」も、バッハと同じく4つの声部で展開し、冒頭のテーマもアルトに現われる。また、曲の終わりには“カデンツァ”と記され、グルダの得意とした即興演奏が取り入れられる。 M

## 角野隼斗：追憶
Hayato Sumino: Recollection

ショパンのバラード第2番の旋律をリハーモナイズし現代的に解釈した作品。クラシック作品の旋律を引用し、再構築するという手法は「リコンポーズ」と呼ばれ、近年ポスト・クラシカルのジャンルでしばしば取り上げられる。暗くて狭い部屋の中で一人自らの過去を追憶しているような、あるいはショパンと静かに対話をしているような、非常に内的な雰囲気を纏っている。いくつかショパンの作品の断片が、走馬灯のように聴こえたり消えたりを繰り返しながら、物語的に展開されていく。ショパンへの愛がそっと詰め込まれた作品。 S

## J.S.バッハ：主よ、人の望みの喜びよ BWV147
J.S.Bach: Wohl mir, daß ich Jesum habe BWV147

ライプツィヒでは、バッハは教会音楽の創作を数多く手がけた。「主よ、人の望みの喜びよ」の原曲は、1723年に作曲された教会カンタータ《心と口と行いと生活で》の終曲のコラール。教会の礼拝のために書かれたこの作品は、コラールとアリア、レチタティーヴォの10曲からなる。本日は、マイラ・ヘスによるピアノ編曲版で演奏する。 M

## J.S.バッハ：パルティータ 第2番 ハ短調 BWV826
J.S.Bach: Partita No.2 in C minor BWV826

バッハは、ライプツィヒ時代に《6つのパルティータ》の創作を手がけ、1731年に「クラヴィーア練習曲第1巻」作品1として出版した。バッハのパルティータには、彼の作曲したイギリス組曲やフランス組曲と同じく、古典的な舞曲がとり入れられている。《パルティータ第2番》は6つの曲からなり、すべてハ短調で書かれている。このパルティータには、最初に「プレリュード」ではなく「シンフォニア」が、そして最後に伝統的な「ジーグ」ではなく「カプリッチョ」が置かれ、ロンドーも加わるなど、組曲の新しい傾向が示されている。

シンフォニア／荘重な付点のリズムが特徴のフランス風序曲のような部分、アンダンテの落ち着いた楽想に続き、2声のフーガが繰りひろげられる。
アルマンド／右手のテーマを追うように、左手が1拍遅れて模倣して曲は始まる。
クーラント／4つの声部間がポリフォニックにメロディを織り成し、荘重で優雅に表現される。
サラバンド／通常のサラバンドとは異なり、2拍目に力点が置かれず、流れるような楽想である。
ロンドー／2つの声部の掛け合いが印象的な躍動感に満ちた音楽。
カプリッチョ／3つの声部からなり、跳躍進行を用いた弾むような終曲。 M

## 角野隼斗：胎動
Hayato Sumino: New Birth

ショパンのエチュード第1番（Op.10-1）からインスピレーションを受けて作られた作品。グノーがバッハの平均律クラヴィーア曲集第1巻 前奏曲 第1番に主旋律を加えて『アヴェ・マリア』を作ったように、ショパンのエチュード第1番（Op.10-1）のモチーフに、低音の新しい旋律を付加するというアイディアが元になっている。しかしこの曲では原曲と一致する部分は最初の2小節のみで、その後はアルペジオの音形は一貫して保たれたまま、原曲とは違う方向に展開していく。転調を繰り返し一瞬の沈黙を抜けると、旋律は低音から右手へと移り、変ニ長調の華やかな響きが放たれ、未来への希望を暗示させる。新たに生み出されるものへの、力強い希望が込められている。 S

## 角野隼斗：Human Universe
Hayato Sumino: Human Universe

バロック調の厳かなイントロダクションから始まり、プログレッシブかつ神秘的に展開されていく。我々の住む宇宙は実は11次元で成り立っている、という「超ひも理論」からインスピレーションを受け、曲の大部分が11拍子で構成されている。直感的理解をはるかに超えた宇宙の複雑さと、言語では言い表せない人間の複雑な感情とが重なり合って音となる。曲の頭文字であるH・Uは尊敬するピアニストのイニシャルでもある。 S

## カプースチン：8つの演奏会用エチュード 作品40
Kapustin: Eight Concert Etudes Op.40

ニコライ・カプースチン（1937～2020）はウクライナ生まれ。モスクワ音楽院では名ピアニストのアレクサンドル・ゴリデンヴェイゼルに師事。在学中にジャズに関心を持ち始め、卒業後はジャズや映画のオーケストラで活動した。彼の作品には、ジャズにとどまらずさまざまなジャンルの音楽の要素が取り入れられている。また、彼自身も優れたピアニストであることは、自作自演などのCDで知ることができる。1984年に完成した《8つの演奏会用エチュード》にも、ジャズの語法などが見られる。

第1番「前奏曲」／ラテン音楽のような八分音符の刻みが印象的。
第2番「夢」／叙情的な色合いと右手による重音の柔らかな動きの主部に続き、中間部はカプースチンによると「ジャズ・ワルツ」。
第3番「トッカティーナ」／トッカータ的な同音連打が曲を貫く。
第4番「思い出」／ 4分の３拍子と4分の4拍子が1小節ごとに交互に置かれている。主部では左手がメロディ、右手は即興的なパッセージを奏で、中間部では左右が入れ替わる。
第5番「冗談」／ブギウギのスタイルの作品で、低音部がくり返されるリズムは音楽をエネルギッシュに推し進める。
第6番「パストラール」／曲の冒頭には「ノン・レガート」と書かれるなど、一貫して軽快な楽想。
第7曲「間奏曲」／スイングの心地よい音の動きが、途中からショパンのエチュードのような三度の運動へと変化する。
第8番「フィナーレ」／強烈な駆動力の作品。メロディックな副主題は、第2番の中間部と関連する。 M

参考文献：「カプースチン 8つの演奏会用エチュード 作品40」
（作曲者自身による監修・運指、川上昌裕　解説・編）

Photo | Cover, P1, P4, P5 ©RYUYA AMAO
Back Cover, P8, P9 © 鄭達敬 TEY Tat Keng

PriviA PX-S7000
彩る、そのスタイル
ピアニスト角野隼斗が選んだのは
Priviaの洗練されたデザインと上質な響き

#部屋活ピアノ
角野隼斗スペシャルページ

CASIO Music Japan
Instagram

Privia
スペシャルサイト